

# 意味の二要素

— Bhartrhari ヲ Frege —

谷 沢 淳 三

ドイツの哲学者 Frege による、意味の二つの要素の区別、すなわち Sinn と Bedeutung の区別はあまりに有名である。彼に従えば、

同一性の言明「明けの明星 || 明けの明星」と「明けの明星 || 宵の明星」の二つは、「明けの明星」と「宵の明星」の二語とも金星という同一の対象を Bedeutung とするにしても、前者が単なる同語反復なのに対して、後者は両語の Sinn が異なるが故にその与える情報という点で全く異なる。一方、我々は、八世紀のインドの哲学文献において、例えば、次のような議論を見ることが出来る。

例え、「汝がそれなり」という文章において、「汝」と「それ」という二語によって指示される対象が不二なるプラフマンであるという点では、その両者に全く相違がないにしても、その二語は、文章の意味である「絶対者の唯一性」ということ以外の異なった原因に依拠して、不二なる自己を照らし出す

「汝」に対して適用されている。それ故に同語反復ではない。

(Sarvajñānān, Saṃskṛtaparīkṣā 1-161)

ここでは、絶対者プラフマンとは何かという問いに対する回答「汝がそれなり」において、「汝」も「それ」も絶対者プラフマンを指示しているのだから、この文章は単なる同語反復ではないかという疑問に対し、二つの語には異なった原因があるのでそうではないとするのである。この「原因」を、注釈者は「語の適用原因」(pratyakṣa)であるとす。ここで細かい議論は省略するが、とにかくこのようにして、この文章も同語反復とは異なっており、情報を有するものなのである。

この意味の二要素の分け方を、文法学者 Kaiyata (十一世紀) が端的に表している。(他に、語源上の原因 (vyutpattimūlaka) が考えられることがあるが、それに関して今回は触れない。)

そしてそれ(意味 *artha*)は二種類、すなわち指示対象(*vachya*)と適用原因(*prayatnimita*)である。

(*Pratya on Paninisutra* 5-1-119)

本論文では、その意味の二要素の区別を五世紀の文法学者 Bharthari の説に基づいて考察し、Frege との比較という観点から、その違い・特色を明らかにしていきたい。

まず、「語の適用原因」と述べたことから明らかなように、Bharthari など、インド文法学者の考えた二要素の区別は、単語のレベルにのみ当てはまる。一方 Frege はそうではない。彼にとって、主張文の Bedeutung はその真理値(真、或いは偽)であり、Sin は文章の真理条件としての思想である。思想は、真か偽として把握される。文章中の諸単語の Sin は、文章全体としての Sin Ⅱ 思想に貢献する。そのように、真理を問題とする Frege にとって主なのは Bedeutung であり、文章を構成する単語の Bedeutung は、文章の真理値に対する寄与として考えられる。<sup>(2)</sup>

彼の意味論には、関数の観点が導入される。例えば、「日本の現総理大臣」という複合的固有名は、「……の現総理大臣」という関数的表現と「日本」という独立変数記号から成っており、関数値が海部俊樹ということになる。そして、ここで注意すべきは、関数的表現は「飽和していない」もので「補充を必要」とし、独立変数記号はそれだけで「完結した」ものなので両者が結びつくという点である。両者とも完結しているとすると、それらが関

係を有することは不可能となる。さらに、「日本の現総理大臣は水玉のネクタイが好きである」という文章は、「……は水玉のネクタイが好きである」という関数的表現の独立変数の場所が海部という対象を指示する「日本の現総理大臣」という複合的固有名(確定記述)で補充されたものであり、対象と概念で言い換えると、固有名「日本の現総理大臣」の Bedeutung である指示対象(すなわち海部)が「は水玉のネクタイが好きである」という述語(概念語)の Bedeutung である概念の下に帰属する時に真となるものである。そして、その場合の固有名は「完結した」「飽和した」表現であり、述語は「飽和していない」表現である。それに対応して固有名の表す対象は「飽和して」おり、概念語の概念は「不飽和」である。そのようにして、「日本の現総理大臣」という複合的固有名が、海部という対象の名前であると同様に、この文は真理値名となる。このような考え方をすると、上のような単称命題においては、その固有名の対象を必要とするというのが基本であり、前述した通り、Bedeutung が主である。では、Bharthari の方はどうか？

文法学の扱う言語は、聖典 *śāstra* を除けば日常言語であり、決して上のような主張文の真理値を問うという真理論の枠組みで考えられているのではない。そして、伝統的にインドでは、語の意味を普遍とする立場と個体とする立場が併存していた。また、Bharthari の議論の前提となっている書物 *Mañadhya* の中に、

次のような詩節が引用されている。

語は自らの意味 (svārtha) を意味して、(それ以外の原因に) 依拠せずに、その内属している個体を述べる。……

(on *Pratīśāstra* 5-3-74)

ここで、明らかに単語の意味に関して①自らの意味 (svārtha) と②個体 (≡指示対象, *dravya*) の二種類の区別を見ることができ、それ故に、ここでの「自らの意味」というのは、後代「語の適用原因」を指すと解釈されている。

「語の適用原因」とは大きく分けて①全体としての本質的属性 (*jaṭi*)、②性質 (*guṇa*)、③行為 (*Kriyā*)、④関係 (*sambandha*) というものである。これは、文法学の伝統的な語の種類分けに対応している。例えば「あそこを走っているオグリキヤップ」という馬は「白い」において「走っている」は③を述べる語であり、「オグリキヤップ」は対象の側に適用原因を持たない「恣意的な語」 (*vadrocchāsābā*)、<sup>①</sup>「馬」は①を述べる語、「白い」は②を述べる語である。このように、文法学の伝統的な語の分類に従って「語の適用原因」が考えられたということから、今述べたような単純な表現のそれぞれにおいてそれが考えられているという点に注意すべきである。(文法学派では、複合語全体の適用原因は、一般的に前述の中の(後分の語の意味の前分の語の意味に対する)〔関係〕であるとする。) そういうわけで、例えば *Vākyaprajya* の 3-14 *Vyāsaṃuddesa* (文法的組成の詳察) において「黒い胡麻」 (*Kṛṣṇas*

*tīla*) という表現における *krṣṇa* と *tīla* において、次のように *Bhartṛhari* は分析する。

「黒い」(*krṣṇa*) という語は、全体としての本質的属性 (*jaṭi*) が知られていない個体 (*dravya*) に対して用いられる。そして「胡麻」(*tīla*) という語は、性質 (*guṇa*) が知られていない個体に対して適用される。(3-14-9)

つまり、「黒い」(*krṣṇa*) は、性質 (*guṇa*) を適用原因とし、その性質を有した個体を指示する。同様に、「胡麻」(*tīla*) は全体としての本質的属性を適用原因としてそれを有した個体を指示する。そのようにして「黒い胡麻」(*krṣṇas tīla*) という表現全体は、黒い胡麻という個体を指示する。よって、ここにおける適用原因の区別というのは、黒い胡麻という単一の対象に対して、それをどのようなあり方から述べるかという区別である。当然我々は Frege による Sinn が「対象の与えられる状態」<sup>(5)</sup> であると述べられていることを思い出すであらう。

我々は、ここで重要な問題を持つ。すなわち、サンسكريット語には、英語の *The* に相当するような定冠詞が存在しないので、英語やドイツ語のように「確定記述」を明記することはできないということである。(日本語も事情は同様である。) Frege は個体を指示する働きをするものを「固有名」と呼んだが故に、確定記述もそれに含んだ。だが、そのような確定記述を明記することのできないサンسكريットではどうなるのか。そこで *Bhartṛhari*

は次のような疑問を述べる。

諸々の普遍 (samanya) には関係が無いが故に、「黒い」と「胡麻」というような二語は特殊に対して当てはまる。しかし、普遍を述べる語も特殊を述べる語も形に相違がないので、その特殊を両語は表し出すことができない。(31410)

ここで Bharthari が述べている議論は、句、複合語という単位内の要素に留まっている。しかしながら、実は上の 'kr̥ṣṇas tilah' は「黒い胡麻」と訳す場合とは別に、「胡麻が黒い」というように文章として訳した方が相応しい場合もあり、その決定は文脈次第なのである。(それだけでも、英語やドイツ語と大きく違う。)そして、その両方の場合に異なった意味論上の説明が古代インド人によってなされているわけではない。それ故に、最初に述べた「汝はそれなり」の例のように、文章の構成要素としての単語のレベルに広げることが可能である。そこで、その主語・述語の問題と関連して考察してみよう。

例えば、サンスクリットの 'subhṛtyah durlabhaḥ' (優れた召使は得難い) という文章を Frege 的に分析すれば、'subhṛtyah' (優れた召使) という文法的主語は固有名ではなく、概念語であり、実際この文章は例えば「誰かが優れた召使ならば、それは皆得難い者である」(yo yah subhṛtyah saḥ saḥ durlabhaḥ) というように、'subhṛtyah' を述語として書き換えることができる。一方、'tarnuḥ svah' (馬は若い) は、おそろしく話し手の目の前にいる馬を指して

'asvah' という語をその話し手は使用し、'tarnuḥ……' という述語で表される概念は、その固有名の指示する対象に対する第一階の概念である。しかし、その 'subhṛtyah' と 'asvah' の両者においては、定冠詞のような固有名(主語)かどうかの区別を表すものはない。

そうすると、サンスクリット語の場合に Frege の言うような、単称文における固有名(主語)——概念語(述語)分析が当てはまるかどうか極めて疑わしい。つまり、Bharthari にとっては、Frege の言ったような単称文における固有名(主語)の Bedeutung → 対象概念語(述語)の Bedeutung → 概念、という図式は出てこない。

次に、飽和・不飽和という観点で、サンスクリットの 'kr̥ṣṇas tilah' (黒い胡麻) という表現の構成語を考えてみよう。サンスクリットでは定冠詞に当たるものが無いが故に、上で Bharthari が述べているように、この両語は、基本的に普遍 (kr̥ṣṇa という性質と tila という全体としての本質的属性) を意味している。つまり、定冠詞で明示される確定記述と異なって、ここでの 'kr̥ṣṇa' も 'tila' もそれぞれそれだけでは、対象を指示することのない、それ故に Frege 的に言えば「飽和していない」表現なのである。そこで、上述のように、この両語が関係を有することにより、個体を指示することとなる。つまり、

そのように両語は近接してあるならば、排除 (bheda) によって表示するので、'kr̥ṣṇa' という語は tila に対して黒以外の

性質からの、*tila* という語は *kṛṣṇa* という性質に対して、  
(他の *jaṭi* からの) 排除 (*avaccheda*) の如くを引き起こして、  
疑いを消し去る。(3-14-11)

ただしここでは「黒い胡麻」という概念の外延が決定すること  
しか説明していない。それが特定の個体を指示するには文脈を必  
要とする。このこともやはり、サンスクリット語が確定記述を有  
しない点に基づいていると言える。

このように「全体としての本質的属性を述べる語」と「性質を  
述べる語」との区別で考えてみると、上に見た議論では、その両  
者とも、同じレベルで考えられているように見える。すなわち、  
お互いに、対象を指示するにはお互いを必要としている。

しかし、「黒い」と「胡麻」が対象を指示する上で、全く同じ  
レベルにあると言えるであろうか。事実、彼は両者をはっきり区  
別する議論を述べる。

*kṛṣṇa* (黒い)などは、他の語を予期すること (*akāṅkṣa*) を有  
して個体 (*dravya*) を表示する。*tila* (胡麻) などにおいては、  
適用原因である [*eti*] に従うことによつて、そのような (他  
の語を予期することを有して表示する) ということはない。

(3-14-24)

これを Frege 的に言うと、性質を述べる語はそれだけでは飽和  
していないので、個体を指すには必ず全体としての本質的属性を  
述べる語を必要とする。その意味で、性質は第二義的なものである。

一方、全体としての本質的属性を述べる語はそれだけで個体を指  
示し得る。それ故に、全体としての本質的属性を述べる語が「限  
定されるもの」で、性質を述べる語は「限定するもの」である。<sup>(10)</sup>

上の意味から言えば、固有名と概念語の区別に近づくものがサ  
ンスクリット語の場合にも考えられうるかも知れない。しかし、  
その場合でも、前述したように、確定記述に相当するものがない  
という点で、全体としての本質的属性を述べる語であってもそれ  
だけで固有名とは言えず、やはり、Frege の言うような固有名と  
概念語の区別に当たる解説は *Bhartrhari* などの文法学者によつ  
てはなされなかつたと推定される。

次に、語の適用原因の存在論的考察へと入る。

Frege にとつて、*Sinn* とは、客観的に存在し、永遠で、我々に  
よつて把握可能なものである。論理学者、真・偽を説く者として、  
客観性というのは当然重要なことであり、彼は、人間の心の中  
にあるものは主観的なものであるが故に、*Sinn* が心的なものである  
ことを強く否定した。<sup>(11)</sup>

一方、*Bhartrhari* などの文法学派の一般的な考えは、意味を心  
にあるとすることである。では、この心の働きと語の適用原因の  
関係はどのようなものなのであろうか。 *Bhartrhari* は次のような  
議論を述べる。<sup>(12)</sup>

例えば、牛という個体が、「牛性」という全体としての本質的  
属性というあり方で表現されると牛という語で表現され、また

その牛の黒い性質に関して述べられるのならば、「黒い」という性質としてのあり方で表現される。真実にはひとつの「黒い牛」に対してその両語が述べられているにしても、あたかも心の作用によって、その二つのあり方により異なっている如くに述べられる。そしてさらにその二つの段階が融合する第三の段階としての個体が考えられる。しかし、実際は単一の個体があるだけであり、そのような区分をするのは心の働きにすぎない。すなわち、「黒い」「牛」と分析した段階においては、それらは完全に心のレベルにある。そして彼はそれによって、それらが実在としてのあり方とは異なつて想定されたものであることを強調しているのである。それ故に、Sternが客観的な実在であることを強調した Frege とは大きく異なっている。

以上述べてきたことから Bhattacharya にとつても、適用原因を考ふる文脈では指示対象の存在というのが前提となっている。しかし、ここでは真理が主となつていないので、日常表現では指示対象が外界に存在しない表現があつても問題とはならない。彼にとって語の意味は想定された存在に働くものであり、その背景には、日常表現で我々が理解する意味は、実在とは異なっているという考えがある<sup>(15)</sup>。彼の説を発展させれば、指示対象が外界にない表現の場合は、それを想定された存在に考えて、それに対してさらに多様な語の適用原因を考えれば良い。例えば、「シャーロック・ホームズ」という対象を想定して、それに対して「名探偵」

とか「医師ワトソンの友人」とか異なつた適用原因に基づく語を考ふる。このように、Bhattacharya の意味論は、基本的に意味は何かの存在であるという枠内に留まり、矛盾をなくするために存在に段階を設ける類のものである<sup>(16)</sup>。(これは、Mahabhasya における「語は存在を逸脱しない」という言明に基づいてゐる。)

## 結 論

Frege にとつて、概念語(述語)の Bedeutung が概念の外延や主語と同一の指示対象ではなくて概念であるという考え方の出てきた根拠は、上述したように、彼の意味論が関教論の観点から主張文を真理値名とする真理論の枠組みで捉えられて、主張文の真理値にいかにか寄与するかという観点で述べられているところに原因がある<sup>(18)</sup>。もし、概念の外延が概念語の Bedeutung ならば、それは対象なので、自存的なものとなり、述語的性格、すなわち不飽和性という概念の重要な特性を欠き、彼の意味論にはそぐわない。

一方 Bhattacharya の意味論が真理論の枠組みにはないことは既に見てきた。彼が意味の心像説をとつた根拠は、意味が彼の言うところの実在ではないということにある。日常の文章のレベルでも、彼によれば、文章とその意味のみが真実のものであり、それを構成する単語とその意味は便宜上分析されるものにすぎない<sup>(19)</sup>。Frege の文脈主義が、語の意味を心像とする考え方を排斥するものであ<sup>(20)</sup>る一方、Bhattacharya にとつて、文章のみが真実という考え方は、

だからこそそれを構成する単語の意味は想定されたものにすぎないので、心によるものだということになるのである。(23) また彼によれば、全ての語の究極的な指示対象は實在 Brahman であり、全ての語の究極的な適用原因は實在 Brahman の本質でもある satya (存在)なのである。そして気をこけるべきは、その前者は日常表現のヘルムでの指示対象を、後者はそのヘルムでの適用原因を越えた、背後にあるものな点である。日常表現で指示対象と理解されるものは、真実の立場から言うところ、また想定されたものにすぎない。彼の言語哲学の背景にはこの形而上学的観点が存在しており、彼の説く日常表現の意味の世界は、實在ではない。そこに Frege の真理値名としての文章という観点からの真理論と結びついた實在論的傾向の強い意味論との大きな違いがある。

- (1) G. Frege, 'On Sense and Meaning', *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege* (TPWGF), ed. by Peter Geach & Max Black, Oxford, 1980, pp. 56-78.
- (2) cf. Michael Dummett, *Frege: Philosophy of Language*, London, 1981, pp. 152-159, 159-160, 180-186. 野本和幸『フレイゲの言語哲学』勁草書房、一九八六年、七五-七七、九七-九八ページ。飯田隆『言語哲学大辞典』勁草書房、一九八七年、一〇〇-一二四ページ。
- (3) cf. Frege, 'Funktion and Concept', *TPWGF*, pp. 31-32; 'Comments on Sense and Meaning', *Posthumous Writings*, Oxford, 1979, pp. 118-125.
- (4) cf. Dummett, *Frege: Philosophy of Language*, pp. 160-171;

Gareth Evans, *The Varieties of Reference*, Oxford, 1982, pp. 1-41; Gregory McCulloch, *The Game of the Neme*, Oxford, 1989, pp. 5-40.

- (5) Frege, 'On Sense and Meaning', p. 57.
- (6) cf. J. S. Speijer, *Sanskrit Syntax*, Delhi, 1973, § 31.
- (7) Frege, 'On Concept and Object', *TPWGF*, p. 47.
- (8) 橋本『フレイゲの言語哲学』四一-四二、一〇五ページ参照。
- (9) cf. *Mahābhāṣya on Pāṇinīśītra* 1-2-58.
- (10) Vṛttisamuddesa (25) (27).
- (11) Frege, *The Foundations of Arithmetic*, tr. by J. L. Austin, Oxford, 1980, Intro. p. 10 § 26; 'On Sense and Meaning', pp. 59-60.
- (12) 谷本淳三『インド文法学派における意味の問題—常任な意味と心像としての意味—』『東方学』七号、一九八九年、二二八-二二九ページ参照。
- (13) Vṛttisamuddesa (12) ~ (15).
- (14) cf. Gregory Currie, 'Frege's Metaphysical Argument', *Frege: Tradition & Influence*, ed. by Crispin Wright, Oxford, 1984, p. 152.
- (15) *Vākyopadīya* 3-3-39-51.
- (16) cf. Dummett, *Frege: Philosophy of Language*, pp. 196-197.
- (17) *Mahābhāṣya on Pāṇinīśītra* 5-2-94.
- (18) cf. Frege, 'Comments on Sense and Meaning'; Ernst Tugendhat, 'The Meaning of "Bedeutung" in Frege', *Analysis* 30, 1970, pp. 177-189.
- (19) cf. *Vākyopadīya* 2-28, 29 節。
- (20) Frege, *The Foundations of Arithmetic* § 60.
- (21) cf. *Vākyopadīya* 2-134-137.
- (たにやむべしとせん) インド哲学・文法学 (東京大学助手)